

——北村先生は、もともと高校の先生で、覆面作家としてデビューしたという経歴をお持ちですが、その頃のお気持ちなど教えていただけますか。

もともと、図書館と本が好きで、本に囲まれていました。当然「書けたら」という気持ちもありましたが、簡単には書けませんでした。小学生のころ1ページくらい書いてやめてしまっていて、高校のとき星新一¹先生のようなショートショートなんかを書いて友達に見せていました。大学の卒論は400字100枚とかで、これは大変だなあと考えたものです。

これが一番有効な小説の書き方、というのは「最後まで書け」ということだそうです。どうして書けるようになったかという、人生経験を重ねたことが大きいと思います。乙一²さんなどは高校生のときにデビューしていますが、私は、大学生までは良き読み手であろうと思っていました。

ある程度40近くまで生きてくると、これをかたちにしたいと思うことが、コップに水がたまるように増えていきました。そのころ、ちょうど知り合いの戸川さんという方が、東京創元社の編集者をやっていらして、書くことを勧めていただき、発表することになりました。私のデビューは（出版社や新人賞などに）送って読んでもらう、応募するというものではありませんでした。

その作品³が「このミステリーがすごい！」という雑誌で評価をいただいて、幸せなスタートを切れたわけですが、プロになるというよりは一冊本が出れば良いなという感じでした。覆面作家にした理由というのは、戸川さんと話をしている、好評だと注文がきますよ、と言われて、（高校の先生だった）当時は、これは面倒だな、と（笑）。それで覆面作家ではじめましたが、結局講談社さんに「編集者としてではなく一読者としてお会いしたい」と殺し文句を言われたり、そのあとも新潮社さんに「単行本で出しますよ」と言われて揺らいだりしながら本を数冊出せるようになったわけです。

——それで、最初は作家と高校の先生だったわけですね。

作家じゃ食えませんから（笑）。作家の奥さんが働いて…なんていうのは、昔からありますが、私の場合は幸い共働きというのもあって、その後、奥さんにも働いてもらって、作家に専念する環境になりました。

¹ 星新一：小説家。SF作家。ショートショート作品を生涯で1001編以上の作品を残している。

² 乙一（おついち）：小説家。17歳（執筆時は16歳）でデビューし、マンガ化・映画化された作品も多い。

³ 「空飛ぶ馬」（東京創元社／1989年／ISBN:4-488-02316-9）

——最新刊『飲めば都』は、いわゆる“のんべえ”な出版社勤務の主人公、都と仲間たちの仕事や恋が描かれている作品で、楽しく読ませていただきました。ちょっと今までの作品の登場人物とは違うな、と思ったのですが、先生はどのように作品を作り上げていくのでしょうか。

その時々によって書きたいものが浮かんで、そこから生まれてきます。『スキップ⁴』なんかは、人間やっぱり40くらいになるとふと振り返って、こっちにきてよかったのかなとか思い始める。そういう「思い」というのは普遍的なもので、その思いを残すために書きました。女子高校生がおばさんになっていた、という話ですけれど、時がたってしまう残酷さは女性でないと面白みがないので男子学生でないだけです。これはSFではなくて、ごく普通のことを、かたちを変えて描きました。親子で読んで互いにそれぞれ感想を持った、なんていう話を聞いてうれしかったですね。

『飲めば都⁵』は、あるとき編集者の方からエピソードを聞いて、これを組み合わせると短編ができるなと思ったのがきっかけです。酔っ払いの面白い話がありますか、と聞いたら出るわ出るわ…これをつなげると長編になると思って。取材したエピソードの中には残せないようなひどいものもありますが（笑）。

高校生が書いた小説のコンクールの審査をした際、主人公の気持ちをうまく表すことのできた人がいました。たとえば、「離婚したお父さんに今までは制服で会いに行っていたけど卒業したあとはコスプレになっちゃう」なんていう文章は、その主人公の性格とか季節とか無理なくでてくる。これが小説的、なんですね。そのものの説明がなくても浮かんでくるわけです。これから短編ができるんじゃないか、という。

吉行淳之介⁶さんのエッセイ⁷にあった話なのですが、（全体の話は省略）ビールをがしゃん！と割ってやろうとしたら割れなくて、「ごん」って音がして、その瞬間我にかえって…という話（※）。こういう話ってなかなかないでしょう。こういうエピソードをいかにつかまえるか、というのが小説なんです。短歌や俳句も同じですね。俳句なんかをやるようになると、ただの景色が変わっていくっていいですね。俳句を作ろう、小説を作ろうという目で見るわけです。

※エッセイ「鬱の一年」より（一部、旧漢字を新漢字に直してあります）

…罵り声を上げ、手近の椅子の背に、ビール瓶の胴中を叩き附けた。ヤクザ映画で観たように、胴の途中で叩き割ってギザギザにしたビール瓶を、腰のあたりに構えようとおもったのだ。

しかし、Iの手にあるビール瓶は、椅子の背で撥ね返り、元の姿のままである。

不意に、恐怖がむき出しになり、一瞬の間に元のIに戻った。…

⁴ 「スキップ」（北村薫／新潮社／1995年／ISBN:4-10-406601-X）

⁵ 「飲めば都」（北村薫／新潮社／2011年／ISBN:978-4-10-406607-0）

⁶ 吉行淳之介：作家。代表作に『驟雨』（芥川賞受賞作）など。エッセイの名手としても有名。

⁷ 「鬱の一年」（「新潮」昭和43年7月号初出）

このエッセイは「**なんのせいかわが文学生活**」（吉行淳之介／潮出版／1982年）に掲載されている。

——私たちには未知の世界ですね。

そんなことはありません。あの人らしいな、とかそういう表現に出会うことってあるでしょう。先生への面白いあだ名などもそうですね。すごく特徴をとらえている。これはいかにも〇〇さんらしい、そこに人間が現れるわけです。

——それで、先生の作品の登場人物は顔が浮かんでくるのですね。

そうです、といえたらカッコいいんですけど（笑）。

——先生は、作家として作品を生み出すだけでなく、ミステリー愛好家・読書家として、アンソロジーの編集をされたり論説を書かれたりされています。新潮選書の『北村薫の創作表現講義⁸』でもいろいろなジャンルの本について語られていますが、「読むことの愉しさ」について教えてください。

読むことが愉しいのは、能動的な行為だからでしょうね。ある人が読んで読めなかったものが、他の人なら理解できる。高校時代で分からなくても、人生経験をしたりしながら大学生になってこんな素晴らしい本をなぜ分からなかったのだろうと思うわけです。

評論家の方が書いた解説を読んで「ああそうなんだ」と。俳句もそうですよね。小説でも若いころは全然面白くないとけなしがちですが、名作と呼ばれるものの良さは今の自分が分からないだけだ、と謙虚さを持つ方が（けなすより）良いですよ。「おいしいと分かる」ように、自分にとって豊かになる行為が読書であると思います。

学校でもそうですよね。中学生の子が自分で読んですごく感動したけれど、学校で授業を受けたら非常につまらなかったということが多い。しかし、授業の中で、自分で分からなかった部分にプラスがあれば面白くなるわけです。古典や名作は、見えないけれど大切なものが多いですから、自分で向かっていくつもりで読むと新しい発見があるものです。

——自分のことを思い返してみても、国語で習ったりするとつまらないなと思ってしまい、それが活字離れにつながったりするような気がします。どうすれば戻れるでしょうか。

小学校の「朝読」なんかはいいですよ。活字はやっぱ面倒。食べやすいもの・食べづらいものというのと同じで、今の子供は、せんべいは億劫だというそうです。読みたいと思った小説とコミックがあったら、コミックを読むでしょう。コミックは映像が出てきますが、小説は映像がないからもうひとつ作業がある。しかし、固いものを噛むと味が出るように、朝読なんかで活字に慣れることは非常にいいことです。

コミックがアニメ化されるとだいたいの人が「この声は違うな」とか思う。声を出して読むことはないけれど、頭の中でイメージしているわけで、小説になると、その上に映像まで

⁸ 「北村薫の創作表現講義 あなたを読む、わたしを書く」

想像しているものです。俳句などは作者が作ったものを違うように解釈されて、評価されて、そこで作者が「そうか、じゃあそうしょうか」となるわけです。結局小説もそうです。

しかし、読みの怖さというのもありますね。評論などを読むと、他人のイメージに引きずられてしまう。できれば自分の感想をもって、他の人の評価を聞く方がいいですね。朗読を聞くのが好きですが、朗読をする人の解釈によって印象が変わるのが面白いですね。先に聞いた方がイメージとして残るわけで、引きずられてしまいがちです。

今日BGMで流してもらったモーツァルトの弦楽四重奏曲メヌエットですが、村上陽一郎⁹さんの「人生の節目の、この一曲」というエッセイを紹介します。

——自館所蔵の『モーツァルト・ベスト 101¹⁰』に載っている村上陽一郎さんのエッセイ（人生の節目の、この一曲）ですね。

村上さんは、趣味でチェロをやられていて、冬のある日に4人グループで四重奏曲をやることになって、そのうち村上先生はメンバーのひとりに恋をしてしまいます。好きなバイオリンの奏者にチェロで伴奏をつけていることに至福を感じていたのですが…われわれの世代はよく分かると思うのですが…みぞれが降る中、相手に傘をさしかけて、その腕をそっと外されて「あ、そうか」と思ったと、その想いをそこで諦めてしまうというエッセイです。こんな話を聞くと聴きたくなるでしょう。で、聴くともう、みぞれのイメージが浮かぶわけです。

（実際に演奏を流す／「ハイドン・セット」弦楽四重奏曲第15番 二短調 K.421）¹¹
この繰り返しが、際限ないみぞれに見えるわけです。どうですか。

何気なく聞き流していた音楽が、ドラマチックに聞こえる。それはひとつの豊かさです。これは評論も同じで、自分にまったく読めていなかったけれど、ある人の評論によってなるほどと読めるようになる。引きずられてしまうようにもなりますが、ひとつの例として教えられると読みが深くなるわけです。引きずられることは怖いけれど、自分自身を豊かにするためにいろんな人の評論を知る必要もあるということです。

読み聞かせにはあまり感情をこめて読まないでくれという指導が入るようですけど、「承知しました…ご命令のとおり…」（淡々とした話し方をする）なんていう「ミタさん」¹²みたいなのはどうも。映像をイメージするには多少は必要でしょうね。

『花もて語れ』¹³という漫画を去年からまわりに勧めています。朗読についての漫画なのですが、これがとても良くて。宮沢賢治の「やまなし」などが題材になっていますが、さっと読んでしまうといかにもったいないかというのが分かります。私なんかはラジオ世代で

⁹ 村上陽一郎：科学史家・科学哲学者。現・東洋英和女学院大学学長。

¹⁰ 「モーツァルト・ベスト 101」（石井宏編／新書館／2004年／ISBN：978-4-403-25075-0）

¹¹ 「弦楽四重奏曲第14番～第19番『ハイドン・セット』」

（ジュリアード弦楽四重奏団演奏／ソニーミュージック／ASIN：B000F9UE0M）

¹² 平成23年10月から放送された連続ドラマ「家政婦のミタ」の主人公。

¹³ 片山ユキヲ（朗読協力・朗読原案：東百道）による漫画。小学館。（府中未所蔵）

すが、ラジオは映像がなくても楽しめる、イメージが広がるものですよね。府中市の図書館にも朗読CDとかありますよね、まず自分で声に出してみても、朗読CDと聴き比べてみる。そうすると新しい発見がありますよ。

——お子さんには「読むこと」への働きかけはどうされましたか？

何もしてませんでしたね。家の中に本がある、という環境ですね。私も「これを読め」ということはされなくて、自分から手を出せるというか、そんな環境があるといいですよ。

子どものころ『秘密の花園』という本のタイトルにすごく惹かれて、でも恥ずかしくて読めなかった。『赤毛のアン』も同じく今になっても読んでいないんですけど。赤木かん子¹⁴さんが、小学校の図書室の飾り付けは5・6年生の男の子をイメージせよ、とおっしゃっていました。女の子は男の子っぽいのも気にならないのですが、男の子はお花とか飾ってあるとだめですよ。選書も同じですね、子どもの好きなものって、虫とか、大人の選ぶものとは違う。花でも小さな花ではなくて大きなひまわりとかだという話でした。子どもの興味があるものをそろえてあげたいですね。

赤木さんの『読書感想文の書きかた¹⁵』も面白くて、ひっくりかえってしまいました。本の選び方で、「感動した本はやめましょう」と最初にあるわけです。のっけから「感動した本はやめましょう」とあったら読者のつかみはバッチリですよ。そして、ただ面白いだけでなく、とても内容のある本です。

赤木さんが小学生の時に書いた作文が想像豊かだったわけですが、どんな感想をもらえるかと思ったら、先生から「ウソを書くのはやめましょう」と返ってきてしまった。悪い先生ではないのでしょうけど、感性的に本好きの子供を殺してしまったかもしれないですね。教員って怖くて大変な職業ですね。

——図書館好きなイメージがありますが、図書館めぐりはされていますか。

大いにしていますね。「ああ、あそこの図書館にならあるな」のように、こっこの図書館はここが強いとかありますし。だから近隣の図書館だったら、同じ全集は揃えないでほしいとか思ってしまうですね。〇〇全集はこっちにあって、とかカバーし合ってくれると嬉しいですよ。

インターネットなんていうのは便利ですけど、本好きの能力を評価されなくなってしまうというか、つまらないですよ。何十年も前の話ですけど、「あの本どこにあるかな」「それなら神保町の何軒目の書店のあそこの棚の何列目の…」なんて説明できるのは醍醐味ですよ。編集者の方が電話かけてきて「チャーホフの掌編で…」なんて相談されて即答できると鼻が高いですよ。インターネットは便利ですが、本のおいとか手触りとか本を見つけた喜びとかは変えられません。

¹⁴ 赤木かん子：児童文学評論家。「本の探偵」としてデビューし、子どもの本や文化の紹介、書評などで活躍。

¹⁵ 「お父さんが教える読書感想文の書きかた」（赤木かん子／自由国民社／2009年／ISBN:4-426-10784-0）

ある図書館の講演会で図書館への要望ありますか、と聞かれた際に、「全館月曜休館やめて、どこか開けてください」といったら参加者から拍手がありましたね。やっぱり難しいのでしょうか。

——府中市は月曜日開館していますよ。ぜひ。

ああ、それは失礼しました（笑）

——最後に、図書館への思い、こうあってほしい、などありましたらお聞かせ下さい。

図書館の良さというのは、表にでていない書庫の本がどれだけあるかにかかっています。ですから、書庫の本の充実と、それと廃棄図書に目を配って、「捨てるはいけないもの」を見極める力が必要だと思います。

赤木かん子さんに言わせると、児童書などで、「おいてはいけない本」なんていうものもあるそうですね。科学はすぐ進歩してしまいますから、置いておくとまずいものがある。廃棄にかかわる司書の方って勉強が必要だろうなと思います。新しい版がでて、旧版を捨ててしまってもよいのかというと、底本が違うこともありますし、「捨てる技術」を持ってほしいですね。

——ありがとうございました。

——最後に先生のご予定をお聞かせ下さい。

小説新潮で、「うた合わせ」という短歌に関する連載をしています。面白くてやっているものですが、短歌をふたつあわせて載せまして、それに対してエッセイを書いています。もともとは百人一首が二句ひと組になっているという発想があることを聞きまして、面白いなと思って読み解きなんかしたりしています。

それと、『いとま申して¹⁶』というちょっと地味な本を出したのですが、父・宮本演彦（のぶひこ）の日記をもとに、大正末から昭和初年の主人公の青春を小説にしたものです。これをつけて書いていきたいなと思っております。

——ありがとうございました。

¹⁶ 「いとま申して『童話』のひびと」（北村薫／文芸春秋／2011年／ISBN:978-4-16-329920-4）